



Title	接続法過去-se形と-ra形についての一考察
Author(s)	中岡, 省治
Citation	Estudios Hispánicos. 1981, 7, p. 43-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93600
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

接続法過去-se形と-ra形についての一考察

中 岡 省 治

1. 緒言

1.1. 現代イスパニア語文法にあっては、接続法過去の2形式-se形と-ra形の意味機能には差がないとする考え方が支配的で、例えば、Lenzは“... si cantara se usa como subjuntivo, es absolutamente sinónimo de cantase, una mera variante formal” (もしcantaraが接続法として用いられるとすれば、これはcantaseのまったくの同義語、即ち単なる形式上の一変種である)^(註1)と断定している。しかし一方、Pottierは、「多くの文脈で、この二つの形 (llamara と llamase) は同義語として使用される : antes que llegara = antes que llegase. しかし、たいていのばあい、いずれかの形の選択は理由づけられている : llamase は現実に行った事件や、つよく注視された事件を語る場合に主として用いられる。これにさらに疑惑が加われば llamara を用いるのがふつうである」^(註2)とし、かなり明確に両者の意味作用に差があると考えている。

この二つの意見は体系的にこの2形式が完全に生きた言語形式として機能していることを前提としての観察であろうことはいうまでもない。というのも、日常口語に於いては、後述するようにイスパニア本国では-se形が優勢であり、中南米では-ra形が優勢であると一般に考えられているからであって、このような傾向が極端に押し進められ、いずれか一つの形しか使用しなくなったような場合には上述のPottierの記述は何らの意味をも持たなくなってしまうからである。^(註3)

さて、以下本稿では、現代イスパニア語による6点の文学作品中（口語傾向の強いもの）の用例を中心に、はたしてこの-ra形が単なる-se形の形式上の一変種なのか、それとも両者間には有意的な機能上の区別が存在するのかという問題を考えてみたい。

1.2. 以下にこの二つの形式の意味、機能に関する他のいくつかの文法書の

記述を参考までに挙げておこう。

Real Academia Española: Fuera de los casos que acabamos de mencionar, la identificación entre *-ra* y *-se* es hoy completa, es decir: ambas pueden sustituirse entre sí siempre que sean subjuntivas. (これら上述した場合〔*-ra*形が過去完了として用いられる場合〕以外には、*-ra*形と*-se*形との間の同定化は今日では完全なものとなっている。即ち、この二つの形は、両者が接続法である限りは常に相互交換が可能である)。(註4)

J. Alcina Franch y J. Manuel Blecua: Por otra parte, en el pretérito el uso de la forma *-ra* y la forma *-se* es difícil de delimitar, ya que en la conciencia del hablante se han llegado a igualar ambas formas. (他方、過去では*-ra*形と*-se*形の使用上の境界を画することは困難である。というのは話者の意識の中ではこの二つの形は同一のものとなるに至ったからである)。(註5)

Antonio Quilis et al.: Las dos formas en *-ra* y en *-se* son intercambiables generalmente. La primera es más eufónica y predomina en la lengua literaria: la segunda es más usada coloquialmente. (この*-ra*形と*-se*形の2形式は一般に相互交換が可能である。前者は他方より格調が高く、文語に多く用いられる。後者は口語でより多用される)。(註6)

このように、いくつかの文法書の記述もまちまちで、*-se*形と*-ra*形との意味、機能面での差について具体的に言及しているものは、調査した限りでは非常に少ない。しかし、Vidal Lamíquizの“*Cantara y cantase*” (1971)とMauricio Molhoの“*Sistemática del verbo español*” (1975)の二点は実に有益な示唆を数多く与えてくれると思うので、以下では、この2論文を参考としつつ、議論を進めてゆくことにしたい。(註7)

2. -SE形と-RA形の出現頻度数

2.1. 次に実際の発話の中でこの二つの形式がどのような分布をとっているかにつき、簡単に触れておこう。この調査の対象としては、現代スペイン作家の作品で、極端な文飾、修辞のほどこされていないもの、日常口語に近い言語形式のものとして、以下の作品を選んだ。

- ① R. Sánchez Ferlosio: El Jarama (Ancora y Delfín, 121; Ediciones Destino, 1970)
- ② F. García Pavón: El último sábado (ídem. 458, 1974)
- ③ J. García Hortelano: Nuevas amistades (Seix Barral, 1967)
- ④ Miguel Delibes: Mi idolatrado hijo Sisí (Destinolibro, 31, Ediciones Destino, 1978)
- ⑤ Francisco Umbral: Memorias de un niño de derechas (ídem., 30, 1976)
- ⑥ G. Torrente Ballester: Los gozos y las sombras I. (El libro de bolsillo, 303; Alianza Editorial, 1971)

2.2. 上記6作品における-se形, -ra形出現頻度数表

634	-RA 258	Ind. 6	or. indep. 0		0/ 0/ 0/ 0/ 0/ 0/
			or. subord. 6	adjetiva	1/ 0/ 0/ 3/ 0/ 0/
				adverbial	0/ 0/ 0/ 1/ 1/ 0/
				substantiva	0/ 0/ 0/ 0/ 0/ 0/
		Subj. 252	or. indep. 64		9/ 1/ 8/11/11/24/
			or. subord. 188	adjetiva	1/ 6/ 2/ 2/ 8/ 3/
				adverbial	29/23/ 4/13/ 7/22/
				sustantiva	8/19/ 5/17/ 6/13/
	-SE 376	Ind. 2	or. indep. 0		0/ 0/ 0/ 0/ 0/ 0/
			or. subord. 2	adjetiva	0/ 1/ 0/ 0/ 0/ 0/
				adverbial	0/ 0/ 0/ 0/ 0/ 1/
				sustantiva	0/ 0/ 0/ 0/ 0/ 0/
		Subj. 374	or. indep. 23		1/ 2/ 7/ 3/ 3/ 7/
			or. subord. 351	adjetiva	7/12/ 5/ 6/ 2/ 2/
				adverbial	27/26/40/23/34/18/
				sustantiva	23/20/34/28/28/16/

1. 本表の出現頻度数表示の順序は上記の作家—作品名に付した番号に依っている。
2. いずれの作品においても、およそ 110例までの抽出にとどめた。
3. この 用例中には-se形, -ra形による複合時制も含まれる。
4. -RA, Subj. or. indep. の項は、《O quizá los delincuentes fueran ellos.》

- (Umbral), 《Eso quisiera verlo yo》(Ferlosio), 《Quizá entonces el tren hubiera pasado ya de Leipzig》(Ballester), 《yo la hubiera mandado a paseo si no existieras tú》(idem.) の場合を含んでいる。
5. なお、この使用頻度表示の方法は、註記3のVidal Lamíquizの論文の表に合わせた。

3. -SE 形と-RA 形の機能上の区分

3.1. さて、-se形と-ra形を機能面から分類してみよう。まず、-ra形のみが直説法過去完了として用いられる場合、-ra形が接続法としてのみ用いられる場合、-ra形と-se形の二者が同一の文法環境で相互交換可能なものとして用いられる場合、の三つのケースが考えられる。これは次のようにまとめられる。

- a. -ra形（直説法）と-ra形（接続法）との対立。
- b. -ra形（接続法）のみの場合。
- c. -se形と-ra形（接続法）との対立。

3.2. 上のaの場合に該当の用例には次のようなものがある。

- (1) En los últimos días de septiembre había recuperado el kilo y medio que *perdiera* en su viaje. (Delibes)
- (2) Como Martina me *anunciara*, dos días después llegó por la tarde un nuevo niño acompañado de una señora vestida elegantemente. (idem.)
- (3) Hacía ya casi seis años que Daniel, el mochuelo, *sorprendiera* esta escena, pero estaba...(idem.)

この3例は次の-ra形（接続法）に対立する。

- (4) También podía ocurrir que *vinieran* los guardias, los policías... (Umbral)

また-se形が直説法過去完了の意味で用いられることも僅少であるが存在する。

- (5) Los recibió don Mateo en la misma sala isabelina que *utilizase* para recibirnos a mi tío y a mí. (Delibes)

3.3. 上のbに該当の用例には次のものがある。

- (6) Si ahora *tuviera* España cien tíos como Colón, otro gallo le *cantara*, ¿eh? (Aldecoa)

- (7) Si el gato *hubiera sido* de Antonio, el Buche ..., no *hubiera ocurrido* nada. (Delibes)

この条件文帰結節の -ra形に代えて, -se形もみられるが, これは文法上適格ではないと考えられている。^(註8)

- (8) Las voces que voceaba *hubiesen resultado* abstrusas e incoherentes si todo el pueblo no hubiera estado al cabo de la calle. (Delibes)

次いでは -ra形が単独で独立文に用いられる場合を挙げねばならない。

- (9) Preferiría un camión. *Quisiera* tener un camión y hacer portes. (Hortelano)
- (10) Tú *debieras* estar o en la cama o en la calle. (Aldecoa)
- (11) Juan miraba a la muchacha. Le *hubiera gustado* compararla con cosas. (ídem.)
- (12) ¡ Quién *pudiera* convencerla!
- (13) *Dijera* o no *dijera* la verdad, tendremos que creerle.
- (14) *Saliera* lo que *saliera* estábamos dispuestos a aceptarlo.

この場合にも次のような -se形の使用がみられるが, 文法上適格とは考えられていない。

- (15) Al pasar junto a la casa de don Lotario a Plinio le *hubiese gustado* darle un aviso, pero... (Pavón)

3.4. 次に, -se形と -ra形が接続法として同一の統語条件下に用いられている場合を挙げよう。

- (16) Leopoldo gritó que *entrara*. (Hortelano)
- (17) Y yo, que lo supe, vine a decirle que no lo *hiciera*. (Ballester)

但し, この場合に次の様な用例があるもの興味深い。

- (18) Estaba obsesionado con la idea de que alguien se *pusiera* nervioso y le *arreasen* al cura. (Pavón)
- (19) ... es indudable que si mi madre *viviera* y me *escuchase*..., se sentiría defraudada. (Ballester)
- (20) ... mi madre me mandó aprender música para que...*pudiera* sentarme al piano y tocar un vals, y para que las señoras

dijesen... (ídem.)

(21) ¡ Qué más *quisiêramos* ! ¡ Ojalá *fuese* el otoño *fetén* ! (Ferlosio)

(22) ¡ Quizá lo que le *dijêsemos* no *estuviera* de acuerdo
con lo que... le ha dicho... (Ballester)

(23) Que yo *supiera* no había venido nadie.

ここで我々の議論の中心となるのは上記の c の場合、具体的な用例としては(6)~(23)であって、実際に(16)の -se 形と(23)の -ra 形は何らかの意味的な差を内包するのか否か、機能上の差を認めうるか否かを以下に考えてみたい。

4. -SE 形と -RA (接続法) との対立

4.1. 上記の(16)~(23),ここでは両者が等しく、自由選択的に用いられるといわれている場合だが、この [se] と [ra] という音声形式の差が厳然として存在することを考えてみると、この両者が真に自由選択的な場であって、機能上(したがって意味作用のうえでも)何らの差もない相互交換可能な形式として、文体的な価値しか持たないものだと断定するのに大きなためらいを感じる。

たとえば、冒頭1.1.に挙げたような考え方やあるいはこれと同じく、これら2形式は機能、意味的にまったく同一であり、相互交代の可能な、形式上の一変種にしかすぎないとする説に対し、断定的ではないが次のような意見も述べられている。“Para mí personalmente, y tal vez por la modalidad idiomática en que me he criado, si alguien me dijese: ‘Me gustaría que escribiese usted un comentario’ y otro: ‘Me gustaría que no lo escribiera,’ el uso de la segunda me daría mejor la impresión del deseo del interlocutor; la primera no me dejaría completamente convencido del ‘gusto’ que el solicitante decía tener.” (私個人としては、おそらく私の育った言語環境の影響で、もし誰かに “Me gustaría que escribiese usted un comentario” と、もうひとつ “Me gustaría que no lo escribiera” といわれた場合とでは、第二番目の形を使う方が私には話し相手の願望の気持がより強く伝わってくることになるだろう。最初の方を使ったら、そう願っている人が抱いているという “願望の気持” については、私自身どうも十二分に

納得しえないと感じることになるう)。(註9) このように2形式の間に意味上の差が存在するという上記のような観察もあることをここで確認しておきたい。

4.2. V. Lamíquizはこの2形式の機能上の差を *actualidad* という概念との関連で説明している。この *actualidad* という概念は、古くから伝統文法によって特定の動詞の活用形に与えられてきた、*tiempos absolutos* (絶対時制) という概念と共通するところが多い。(註10) この絶対時制とは、通常これら時制の表現する動作の時が、発話のおこなわれているこの今、即ち発話の現在から直接的に計測しうるような時を表示する動詞の活用形をいう。即ち、イスパニア語では、発話の現在を基準として、それと同時の時間関係をいう直説法現在、それに先行する動作をいう不定過去、それに後発する動作をいう不完了未来とがこの時制に属している。これら3時制に共通する特徴は、夫々が意味する動作の成立を話者はその発話の現在と直接に関連付け、正確に設定出来るという点にあると考えられる。したがって、これらの時制によって表現される事柄は話者、聴者に、表現内容の現実性の高さを認識させることにもなるといえる。この発話の現在との直接的な関係をもとに、これらの動詞活用形を“現前化発言のレベル”とし、直接に発話の現在との関係を持たぬ時制形式を“非現前化発言のレベル”とに分類することがある。(註11)

さて、この二つのレベルは直説法だけのものではなく、接続法においても存在すると考え、これを接続法の -se 形と -ra 形との機能上、したがって意味作用の区別設定のために当てはめられれば非常に有益であろうと思われる。但し、上に挙げたような直説法の場合と異なり、接続法の場合にはすべての時制形式が、相関時制 (*tiempos relativos*) 的であるがため、いわゆる発話の現在との関係は常に間接的とならざるをえないが、このような差異はあっても接続法にも、“現前化発言のレベル”と“非現前化発言のレベル”を設定することが出来ると考えられている。

これを図示すれば次のようになるう。

(現前化発言のレベル)

	先 時 性	同 時 性	後 時 性
直説法	canté	canto	cantaré
接続法	cantase	cante	

4.3. 以下に接続法につきこのような配分を可能とするその理由を考えてみたい。

独立文において用いられる -se 形と -ra 形との機能上の差をみると、疑惑の副詞 *quizá* と組んで独立文に用いられる場合には -se 形がまったく優勢である。

(24) *Quería llegar a las once. Quizá no fuese buena hora, pero...* (Ballester)

(25) *Tal vez fuese herencia. Su madre, según su padre, siempre lo temió.* (Delibes)

この(24)と(25)はいずれも過去に言及した場合であるが、これは一般的傾向としての -ra 形による現在、未来への言及に対立する。

(26) *¡ Si fuera mío ese coche !* (M. Moliner)

(27) *¡ Ojalá pudiera verte mañana !* (M. Moliner)

また上記(24), (25)は次のような場合の -ra 形と -se 形との対立に関係付けられる。

(28) *¿ Sería posible que tuviera más dinero ?*

(29) *¿ Sería posible que tuviese tanto dinero ?*

つまり、(28)は(26), (27)の場合と同様に、その *tuviera* はまず基本的には現在か未来の時を指示すると解釈されるようだが、(29)の *tuviese* はそれとは対立的に過去時に言及するものと考えられる。^(註12) つまり -se 形はそれ自体、固有の時を保持すると考えられる形で、これで表現される内容は、話者の発言の態度とは別に、実際上は実現される可能性のあったものともいえるわけで、もし厳密に -se 形と -ra 形との機能上の区別を推し進めるとするなら、-se 形は少なくとも、現前化発言のレベルの一点に位置し、いわゆる発話の現在を基準として、これに先行すると見做される時間単位内で実現されえたかもしれない事柄をいうと考えることが出来る。したがって、これは体系的には接続法現在形の遡及形という機能上の特徴をもつものといえよう。

後発性をいう形式は空白となるが、これはすでに接続法現在の機能範囲となっている。特殊な場合には接続法未来も用いられるが、これは通常、接続法現在で代替されるので、強いていえば、接続法未来は非現前化発言のレベルに属するものとなろう。

(30) El que así lo *hiciera*, pagará su culpa. (María Moliner)

4.4. さて、次には“非現前化発言のレベル”について考えてみたい。これは伝統文法での相関時制と共通する点が多い。Gili y Gaya によれば、「この相関時制とは、それ単独では正確な時間軸上への位置付けが不可能で、文脈や他のそれと関連する動詞や副詞を介してこれを決定する必要のあるもの」として、それ固有の時を設定しえず、その時が間接的にしか計測されないような類の時制形式をいうと定義されている(註13)。

これは例えば、直説法では下図のように、上記の絶対時制が間接話法に転換された場合に現われるものと考えられるが、この事実、これら時制形式によって表現される内容が、発話の現在とは間接的にしか関係をもたず、したがって、現実性への言及の程度は“現前化発言のレベル”の諸時制形式に比べて低くなることを意味するといえる。

(非現前化発言のレベル)

	先 時 性	同 時 性	後 時 性
直説法	cantara (=había cantado)	cantaba	cantaría

上のように、直説法の場合には *canté* と *dije que cantaba* との対立によって現前化発言のレベル(即ち、絶対時制)と非現前化発言のレベル(即ち、相関時制)を設定しえたが、これを接続法に適用した場合、いかなる基準を適用し具体的な時制の配置をおこなうのであろうか。この点については次のように考えることが出来るであろう。

4.5. すでに指摘したことであるが、-ra 形とは異なり -se 形はそれ独自の時を表示しうる可能性が大きく、発話の現在との関連も -ra 形に比べてより直接的であると見做した。即ち -se 形は発話時を基準とし、それよりも遡及的な機能を示すという特徴によって、これを“現前化発言のレベル”に属する時制形式とした。

これに対し -ra 形とそれが表示する動作の時との関係は広汎であって、現在・過去・未来に言及の可能性は -se 形の場合よりもはるかに大きい。

(31) Debiera / debería / debía ser más prudente.

(32) Lo hiciera / haría aquel día por ayudarte.

(33) Tal vez nos ayudara / ayudase / ayudaría mañana si se lo pidiéramos.

このように -se 形には期待しえない機能が -ra 形には存在すること、またこの機能が直説法過去未来(時には不完了過去とも)と共通するという事実によっても、体系的にはこの -ra 形を接続法の“非現前化発言のレベル”に、“現前化発言レベル”の *cante* に対応する形式として位置付けうる。

(非現前化発言のレベル)

接続法	先 時 性	同 時 性	後 時 性
		<i>cantara</i>	<i>cantare</i>

このように -ra 形の位置付けをおこなうことによって、上記 (31), (32), (33) や願望表現に用いられる -ra 形(¡ Ojalá pudiera verte mañana !) と -se 形との適用範囲の差をも説明出来ることになる。

さて、これらの分類によって、-se 形は、現前化発言のレベルに属し、その指示する時は過去であり、問題となる事柄の実現の可能性の高いことをも積極的に意味するという三つの特徴を有するものと推論出来る。いいかえれば、-se 形はいわゆる“過去”という意味を積極的に表わしたいときに選択される形式となるのである。このようにみると、この -se 形と -ra 形の対立にあっては、前者が有標項となり、ここから後者は -se 形とは交換可能であるが、この逆は不可能であるという、実際上の使用に際しての分布範囲の差を説明しうることになる。

5. 2 形式の意味作用

5.1. このような考え方に対し、純粹に意味の差という点から -se 形と -ra 形とを弁別しようとする試みもある。^(註14) 例えば、*Criado de Val* は -ra 形が可能性の表示に、あるいはまた比較や誇張の表現に用いられるとしたうえで、“En cambio, es plenamente actual el significado desiderativo, que suele ir unido a verbos como *querer*, *pedir*, *desear*, etc.: ‘Quisiera que se hiciera algo semejante.’ La forma en -se (*amase*) tiene un significado más general y menos preciso que *amara*, aunque su tendencia actual es asmiradora.”(しかし、願望の意味はまったく新しいのもので、この意味は通常 *querer*, *pedir*, *desear* などのような動詞との関連で表わされている：“私は、出来ればこれと同じようなことをしてもらいたいのだが”。-se 形 [*amase*] の方は、現在の傾向として -ra 形に同化しつつあるけれども、*amara* よりも一般的で、よ

り精度の低い意味を持っている)と述べている。^(註15) するとこの記述は、上で体系的な場から -ra 形を無標項とした考え方とまっこうから対立する。ここでは両者の意味作用に区別を設定し、-ra 形に願望的意味 *significado desiderativo*) を充当しているが、これは接続法の特徴として“願望”という意味の分野の存在を認めることにも通じる。Gili y Gaya など諸家もイスパニア語接続法を二つの意味の範疇に分類し、疑惑的あるいは可能性ありと考えられた動作を表現するための接続法を“可能の接続法”と呼び、必要性のあるもの、切望されるものと見做された動作をいうための接続法を“願望の接続法”と呼んでいる。^(註16) 今もしこの接続法の2大意味範疇の一つに -ra 形の機能を適用出来ると仮定したとすると、体系的に過去時制とされる時制形式にのみ形態素による区別があることになり、現在時制にはそれが存在しないという不合理が生じてくる。

(34) *que viniera ese día.*

(35) *que viniese ese día.*

仮りに(34)を願望とし、(35)をその他の場合、疑惑、可能性などの意味を表わすものとしても、以下の2文、

(34') *que venga hoy.*

(35') *que venga hoy.*

では願望とその他の意味とを区別する基準を見出すことは不可能である。つまり、従属節に現われた動詞活用形態素のみでは二つの意味の区分を設定しえないことになる。勿論のこと、-ra 形と願望的な意味との関連を思わせる次のような用例も多い。

(36) *Doña Mariana me encargó que la visitara. ¿ Puedo hacerlo ? (Ballester)*

(37) *Era cosa de doña Mariana. Ni el padre del señor, ni su madre, que Dios tuviera en la gloria, habían tocado nunca la renta antigua. (ídem.)*

しかしこの願望の意味は -ra 形にのみ特有のものではない。

(38) *Mandó que engancharan su coche. (ídem.)*

(39) *..., si es posible, me gustaría que la vieses y hablastes. (ídem.)*

5.2. Dwight L. Bolinger は -se と -ra 形の2形式を自己の言語体系の中

に保持し、しかも意識して両者を使い分けるとする一イスパニア人の場合を調べ、彼の言語感覚をもとに15種、計34の用例の分析によって、*-ra* 形は上記 *Criado de Val* のいう意味的特性を持つものとの結論に達している。例えば *Si me sintiera/sintiese mejor, me levantaría* という場合、*-ra* 形を用いて話者は「自分が本当に起きたいのだという願望を意味すると共に、ひょっとしたら後で起きてもいいと考えていることを意味するが、*-se* 形ではそのような意味はまったく表わしえない」と述べている。したがって、*¡Ojalá que pudiera/pudiese!—casi creo que pueda* というような場合に *-se* 形を用いると意味的に矛盾をきたし、*¡Ojalá que pudiese!—casi creo que pueda* という発言そのものも成立しえなくなると判断している。

これらの観察の結果、D. L. Bolinger は、*“The inference is that -se implies remoteness, detachment, hypothesis, lack of interest, vagueness, greater unlikelihood, while -ra brings everything into relatively sharper focus”* (註17) との結論を引き出している。事実、日常の使用においては両時制形式の意味作用に差を何ら意識せず、*“prácticamente iguales”* だというスペイン語話者に、一層強く、その意味の差を引き出すよう求めてみると、*-ra* 形が動作の実現に向けてより直接的なニュアンスを示すとか、*-ra* 形の方が暖かみを感じさせる形であるという観察を追加したり、また *-se* 形は現在からの遠隔感を思わせるとか、あるいはこの形をあまり頻繁に用いる人の発言には自信の欠除を感じるという意見、反応などを得ることがある。これらの反応は前述の二つの形の持つ意味的特徴の一部をいうものと思われるが、大きく *-se* 形と *-ra* 形との機能上の対立という点を解明するには十分なものではない。

6. 結論

6.1. 本稿に対する一応の結論として、次の諸点を指摘しておきたい。これまでに挙げた諸説、用例や考察の対象とした *-se* 形と *-ra* 形の使用分布率を検討すると、まずこの二つの時制形式の機能には判然とした差があると考えねばならないだろう。そうするとこの差は最初に述べた体系的な考察から得られる機能上の差、つまり *-se* 形は「現前化発言のレベルに属する形式」として、また「発話の現在に先行する時を示す形式」として有標化

された形式であるとする点に求められるのか、あるいは、Criado de Val, Bolinger の主張するように、-ra 形に固有の意味的特徴として、“願望”の意味を設定しこれを軸に -se 形は“假定、関心の欠除、曖昧さ”などの意味、あるいは共示面での特徴を示す形式と定義し、この特徴と -se 形の使用面での後退を関連付けるか、のいずれかになる。

この2種の結論のいずれを採るべきかについては、次のような考え方も可能である。つまり、-se 形と -ra 形の問題を離れて、広く現代スペイン語での接続法の特徴的意味は何かを考察した場合、これは Gili y Gaya のいう必然的判断 (juicio apodíctico) にもとづく発言の態度、即ち願望の接続法 (subjuntivo optativo) にそれを求められる。これは多くの人々の指摘する特徴でもあり、Dudo que venga と No dudo que vendrá / Deseo que venga と No deseo que venga という統語面での両者の差によっても部分的ながら確認されると思う。もし仮に、このように接続法の直説法に対立する基本的意味は願望 (optación) であると意識されたとしたら、この基本的意味に対し、上述の二つの考察の中で指摘された -se 形を特徴付ける蓋然的判断 (juicio problemático), 即ち可能の接続法 (subjuntivo potencial) は、有標項として制限的にしか適用されない形となってしまう。したがって -ra 形が無標項として、文法的に接続法の使用が義務付けられる多くの場面に適用可能となるともいえよう。

6.2. 終りに以下の事柄を付け加えておきたい。抽出した諸例をある基準によって分類してみると、-se 形は間接話法的な文構造の従属節に現われることが最も多い。以下の(40), (41), (42) のような場合である。

(40) ... que un sábado le dije a un amiguete que *se fijase* en la cédula a ver de quién era el auto. (Pavón)

(41) Una de las cosas que temía era que una mujer *tirase* de ti, y, sin embargo, sería lo natural. (Ballester)

(42) ... la gente andaba con mucho ojo para que no *se le metiese* en casa... (Umbral)

また次のような独立文に優先的に現われる形式であるともいえる。

(43) Tenía los ojos ligeramente enrojecidos y quizá eso *acrecentase* su contenido malhumor. (Hortelano)

もし、こういった傾向がなおはっきりと認められうるのなら、-se 形の

いわゆる“過去時制”としての特徴を裏付けることになり、これを現前化発言のレベルに位置付けるための立派な根拠にもなると考えられる。

これに反して、-ra 形はまず条件的内容を意味する場合に多用されるという結果をえた。^(註18)

(44) Si ahora me *dijeras* que no le estás agradecido, te despreciaría. (Ballester)

(45) Pero aunque así no *fuera*, te lo hubiera dicho igual.
(ídem.)

また、特に複合形の場合には、この -ra 形が条件節にも帰結節にも、あるいは条件を内包した独立文にも現われてくる。

(46) Si a mi madre se le *hubiera ocurrido* hacer de mí un músico, lo *hubiera conseguido*. (ídem.)

(47) Me *hubiera gustado* encontrarte. ¿Qué haces ahora?
(Hortelano)

これらの場合を -se 形と比較してみると、ここで用いられる -ra 形は意味的には“假定・仮説”という概念によって特徴付けられているといえよう。この意味的な特徴は非現前化発言のレベルに位置するという -ra 形の機能と関連付けるとうまく説明がつくのではないだろうか。つまり、条件という表現内容で重要なのは、時の区分、詳述化ではなく、この内容を如何に非現実な場に位置付けるかという点にある。したがってこの -ra 形が、すでに見たように、体系上非現前化発言のレベルに属するがため、ここから無根の假定あるいは非現実の内容を表現するのに適切な形式となり、次いでこれが願望的内容(9)~(12)を表現するために優先的に選択される形式となったものと推論出来る。というのは、この無根の假定、非現実という意味的特徴が“条件、願望”の表出に鮮明な色合を与えることになるからで、時にはこれが-ra形の体系上の機能的意味と錯覚されて、上述の Criado de Val, Bolinger のような観察を生んだのかもしれない。このようにして、体系の一部としての -ra 形が、発話として具体的に実現された場合に多くのニュアンスを生むことになり、そのうちのひとつが -ra 形の場合に“願望”として意識されるのだと想像することが出来る。したがって、条件、願望の内容を表わす文構造のみならず、接続法が広く用いられる文法環境においては、-se 形と対立的に意識された場合の -ra 形の機能上の意味は、それ

が表現する事柄の“非現実性の程度の高さ”であって、これが接続法全般に通じる意味としての“非現実性”と結び付き、-ra を -se 形と対立する無標項として位置付けるに至ったものと考えたい。勿論のこと両形の機能、意味上の中立化への動きも激しいことを付け加えておこう。

したがって、-ra 形は -se 形と対立的に“願望”の意味的特徴を有し、これが記述の対象となった事柄をより鮮明、強烈に表現するので、ここから一方の -se 形の使用が制限され、時には完全に -se 形が消失してしまうというのではないことを強調しておきたい。-se 形と -ra の対立の中で、-ra 形が無標の位置を占めることが、口語にみられるといわれる -ra 形の優勢を招いたものと結論したいのである。(註19)

〔註記〕

- 1) Rodolfo Lenz, *La oración y sus partes*, Madrid, 1920, págs. 455-456.
- 2) ベルナール・ポティエ, *スペイン文法* (島岡茂訳), 東京, 1971, pág. 44; なお, このポティエの記述は K. Togeby の説を引用したものである。
- 3) とくに, Vidal Lamíquiz, *Cantara y cantase* (*Revista de Filología Esp.*, Tomo LIV, 1971), Madrid, págs. 1-7 に諸学者の意見が数多く紹介されている。
- 4) Real Academia Española, *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, 1973, pág. 481.
- 5) J. Alcina Franch y J. Manuel Blecua, *Gramática española*, Barcelona, 1975, pág. 808.
- 6) Antonio Quilis y César Hernández, *Curso de lengua española*, Valladolid, 1978, pág. 188.
- 7) この点かなり詳しく説明を加えているのは Samuel Gili y Gaya: *Curso superior de sintaxis española* (Barcelona, 1967, págs. 177-181) であるが, 最終的には上の *Esbozo* と同一の結論に至っている。なお, この2形式の機能上の一致と差異については, María Moliner, *Diccionario de uso del español* (Madrid, 1971), H-Z, págs. 1474-1475 に実に詳細な記述がある。なお, 本文に挙げた論文のうち, とくに Vidal Lamíquiz のものは, *Los niveles de actualidad* (1971), *Morfosintaxis estructural del verbo español* (1972), *Lingüística española* (1975) などでも再度, 敷衍されている。また, この2形式の使用については次のような説明もある。
 “Il serait vain d'établir, de nos jours, une différence d'emploi entre les formes en «-SE» et les formes en «-RA», tant est grande la confusion qui règne dans leurs emplois.” (J. Coste y A. Redondo, *Syntaxe de l'espagnol moderne*, Paris, 1965, pág. 436).
- 8) María Moliner, *Diccionario de uso*, H-Z, págs. 1474-1475.
- 9) Aristóbulo Pardo V., *Boletín del Instituto Caro y Cuervo*, IX (1953), pág. 315.
- 10) S. Gili y Gaya, *Curso Superior*, págs. 150-151.

- 11) この“actualidad”の概念を積極的にイスパニア語の動詞体系に適用したのは Vidal Lamíquiz である。彼はいくつかの論文でこの問題を論じているが、なかでも、Los niveles de actualidad (Revista de lingüística española, 1971, págs. 89-96) が特に詳しくこの概念を取扱っている。
- 12) Bernard Pottier: Introduction à l'étude linguistique de l'espagnol, París, 1972, pág. 163.
- 13) S. Gili y Gaya, Curso Superior, pág. 151.
- 14) Dwight L. Bolinger, Subjunctive -ra and -se: “Free Variation?,” Hispania, MA, XXXIX (1956), págs. 345-349.
- 15) M. Criado de Val, Fisonomía del español y de las lenguas modernas, Madrid, 1972, págs. 152 y 153.
- 16) S. Gili y Gaya, Curso superior, págs. 131-141.
- 17) Dwight L. Bolinger. Subjunctive -ra and -se, pág. 346.
- 18) 例えば、抽出用例のうち、-ra 形が接続法として副詞節に現われる場合、ここで条件節の占める比率は、Ferlosio (22/29), Delibes (11/13), Ballester (19/22) である。
- 19) 例えば、R. J. Sender, El bandido adolescente, Destino libro, vol. 50 (252 ページから成る)では一度も -se 形が用いられていない。

主たる参考文献

(註記に挙げたものは省略した)

- Alarcos Llorach, Emilio: Estudios de gramática funcional del español, Madrid, 1970.
- Alonso, Martín: Gramática del español contemporáneo, Madrid, 1968.
- Benveniste, Émile: Problèmes de linguistique générale, Paris, 1966.
- Bolinger, Dwight L.: On the -RA- form, Hispania (XXXI) 1956, págs. 341-342.
- Bull, William E., Spanish for teachers, New York, 1965.
- Granados, V. et al.: Lengua española, Madrid, 1979.
- Harris, Martin: The evolution of French syntax, London, 1978.
- Kany, Charles E.: American-Spanish syntax, Chicago, 1950.
- Lamíquiz, Vidal: Morfosintaxis estructural del verbo español, Sevilla, 1972.
- _____ El sistema verbal del español actual, Revista de la Univ. de Madrid (XVIII), 1969, I, págs. 241-265.
- _____ Lingüística española, Sevilla, 1975.
- Lope Blanch, Juan M.: Estudios sobre el español de México, México, 1972.
- Molho, Mauricio: Sistemática del verbo español, Madrid, 1975.
- Marcos Marín, F.: Aproximación a la gramática española, Madrid, 1972.
- _____ Lingüística y lengua española, Madrid, 1975.
- Sole, Yolanda R. y Carlos A.: Modern Spanish syntax, Massachusetts, 1977.
- Val, Criado de: El verbo español, Madrid, 1969.
- Weinrich, Harald: Estructura y función de los tiempos en el lenguaje, Madrid, 1968.